

## 1 教育次長あいさつ（坂元教育次長）

- 平成22年度から開始した本事業も7年目を迎えている。
- 「企業の力を教育に」という熱い思いを共有し、これまで様々な教育支援活動を行ってきていただいたことに感謝する。
- 本日は、企業目線から、本事業の成果や課題、さらには今後の持続的発展を図るための方策について忌憚なく御発表・御協議いただきたい。

## 2 説明「アシスト事業の現状について」（事務局）

- 本事業のねらいや登録企業数、県教育委員会コーディネート数、事業事例

## 3 講話「企業の教育に対する思い」

- 講師 株式会社ホテルマリックス 代表取締役社長 枝元倫介氏

弊社にはマニュアルがない。これまで、笑顔と笑声でお客様に接し、先輩職員の姿からステージを上げてきた。これまで52期の決算を経てきた。52年間の間に、宮崎市内で280件の同業者が厳しい淘汰の原理のもと、退場を余儀なくされた。

なぜ弊社が生き残っているのか。「会社の為の教育」ではなく、「社員のための教育」を念頭においている。今は20歳前後の新入社員だが、5年後、10年後は必ずリーダーになる人材として教育している。入社時から社員に対してリーダー論を語っている。また、過去を問わず（学校教育や家庭教育で何をどう教えてきてもらったのかどうかは一切問わない）、ゼロから教えて導いていく形をとっている。そのことが、会社全体を元気づけている要素ではないかと思う。教育が為されていなければ、先ほどの280社の中に入っていたかもしれない。

今問われているのは経営者の姿勢である。「社員をどう教育していくかではなく」、「社員をどう元気にしていくか」を主眼において経営・教育にあたってきた。

「学校現場、学校の先生方へのご恩返しの為」という考えが根底にある。「報恩」をキーワードに社員教育にあたっている。「報恩」の視点をもつと仕事の仕方が変わってくる。例えば掃除のやり方は分業が通常であるが、弊社では、一つの客室を一人で受け持つやり方をとっている。先輩が後輩を指導・支援するシステムをとっている。

また、研修やインターンシップで受け入れた方々（生徒、教職員等）からのお礼状を社内全体で回覧している。体験した生徒・教職員等からの感謝状は、我々の元気の源になるし、社長から社員に対して、感謝の気持ちを表明する機会となっている。

弊社のアシスト事業への基本姿勢は、「先生方を元気にしてさしあげたい。」「生徒さんの保護者への応援団でありたい。」である。保護者を「内部教育力」とすれば、弊社は「外部教育力」のひとつでありたい。

研修やインターンシップの受入の際は、ホテル業務の全てを体験してもらう。汗をかく業務を必ず体験メニューに入れて、業務終了後は入浴入浴して、気分転換を図ってもらい、その後、また新たな業務にあたっている。

アシスト事業として登録し、様々な体験活動を提供させてもらっているが、受け入れる社員にとっては、良い意味で気が抜けず、ほどよい緊張感を生む効果や、社員同士の馴れ合い防止に効果があり、社にとっても大変意義がある。

感想・質疑

### 【ほほえみの園：山田理事長】

施設長になった5年前から、職員への教育をしっかりしていかなければ、虐待など不幸な事態を招いてしまうという危機感があった。「職員の幸福度が高ければ、利用者に対して良い対応、良い仕事をしてくれるはず」という思いがあった。社独自の新人教育のシステムが組織としてあるが、研修後の感想がありきたりで物足りなさを感じていた。そのような時に、枝元社長と

の出会いがあり、新人を枝元社長のお考えやホテルマリックスのスタッフの思いにふれさせたいという考えから新人教育の一部をお願いした。結果、研修後の社員は職場や利用者への「感謝」の気持ちを育んで帰ってきてくれる。

掃除の際、新人を指導するマリックスのスタッフは「お客様がこの部屋を出るとき、どのような気持ちで帰られたのかを想像してから掃除を始めましょう」とのこと言葉があるとのこと。掃除は単なる作業ではない。このようなスタッフが、職場体験等でお世話になる中高生や大学生、社会人に大変大きな良い影響を与えていると思う。

【(株) ホテルマリックス：枝元社長】

問われているのは経営者である。社の中で一番変革しなければならないのは経営者である。変革できる者のみが生き残れる。変革とは「自分の心を強くすること」「人に優しくすること」「自己改革を生涯続けること」、そして、「みんなで一緒に教育をやっつけよう！という思い」が大切であると考えます。

【(株) 住友ゴム工業：日高課長代理】

アシスト企業としての基本姿勢である「内部教育力向上のために外部教育力の役割に徹する」とはどういう意味か、もう少し詳しく伺いたい。

【(株) ホテルマリックス：枝元社長】(回答)

家庭内において、保護者からの子どもへのアプローチは、内部教育力である。家庭内からみると、学校(先生)は外部教育力である。学校(先生)から企業をみると企業は学校(先生)にとって外部教育力の存在である。同じ教育的な言葉かけでも発する立場によって効果が違う。

外部教育力と内部教育力の相互の連携が重要である。アシスト事業もその一つであると考え、外部教育力としての機能を発揮していくことがアシスト企業としての役割ではないかと考える。

#### 4 協議「これからのアシスト事業について」

(1) 自社紹介【自己紹介・会社紹介】

- アシスト企業の各担当者から、自己紹介及び会社紹介、アシスト事業における教育支援活動の紹介や教育に対する思いを発表

(2) 協議の柱①：アシスト事業における効果・成果について

【宮崎ダイシンキヤノン株式会社：松尾人事部長】

- ・ アシスト企業登録第1号である。今年度はじめ、社長と人事部長で県内の全市町村を訪問し、首長にあいさつを行った。
- ・ CSR活動に力を入れてきており、現在、西都・児湯地区の小学6年生を対象にした「ジュニアフォトグラフアーズ事業」(児童へカメラを貸し出し、撮影した写真を題材に自然や命の尊さを考える事業)を展開している。今後は、県内全ての小学校を対象にしていく予定である。
- ・ 今年度から、小学4年生を対象とした環境教育(3R)もスタートしている。
- ・ 中高生や大学生を対象としたインターンシップや工場見学の受け入れを行っている。
- ・ 社内における研修システム「ブラザー・シスター制度」(先輩職員による新入社員へのサポート制度)を行っており、社員の早期離職防止に成果を上げている。

【京屋酒造有限会社：川嶋総務企画課長】

- ・ 社長の「地元で育てていただいた会社であるので、地元へ貢献していきたい。」という思いから、平成22年の本事業開始時にアシスト企業として登録させていただいた。
- ・ 各種研修の受け入れ(県職員ミドルリーダー養成研修、教職員10年経過研修、中高生等の就業体験実習、工場見学等)を行っている。
- ・ 先日、中部教育事務所管内(南那珂地区)の県民総ぐるみ教育推進研修に参加したが、大変刺激になった。これまで「受入」重視(社に来ていただいて体験し学んでもらおう)の考えであったが、企業側も地元の歴史を踏まえた取組や、社から地域に飛び出した活動を行っていくべきであると感じた。

【住友ゴム工業株式会社：日高総務担当課長代理】

- ・ 中高生のインターンシップや、教職員の職場体験の受入を行っている。
- ・ 緑地グラウンドの開放（グラウンドゴルフ等）や、登下校の見守り活動、工場周辺の美化活動、教職員を対象としたコンプライアンス研修等も行っている。
- ・ 今年度から小中学生を対象とした学習支援ボランティア（毎週土曜日（月1回は休み））を開催している。教職員OBや社員が、児童生徒の自主学習のサポートを行っている。
- ・ 今後も学校や地域の方々が望む教育活動を、企業の立場でできることを工夫を凝らしながら行っていきたい。

【株式会社虎屋：上田社長】

- ・ 約30年前から教育に関わりをもってきており、職場体験として、市内のほとんどの小中高校生の子供達を受け入れている。
- ・ 企業側が子ども達に伝えようとしたことが、どのように伝わっているのかを確認していくことが大事になってくる。

【ほほえみの園：山田理事長】

- ・ 体験学習として周辺小中学校の受け入れを行っている。
- ・ 施設内の「地域交流スペース」を開放（体験活動後の授業スペースや遠足の休憩所として利用）
- ・ 県内に留まる（就職する）学生を増やすために、保護者対象の受け入れ（福祉についての理解促進のための説明会）を行っている。
- ・ 地元の祭りに積極的に参加している。それまで行っていた施設内の祭りを止めて、地域の祭りに予算や人を投入している。子どもの郷土愛を育むことにつながっている。
- ・ 市の職員や教職員の研修の受け入れや、ゲストティーチャーとして市内の学校に職員を派遣している。
- ・ 認知症ジュニアサポーター養成講座の開設や受け入れ、学校運営協議会の委員としても活動している。

【株式会社馬原造園建設指定管理部：黒木さん】

- ・ 造園に関しての体験学習は、危険が伴うので受け入れは行っていないが、平和台公園でアシスト事業としての受け入れを行っている。
- ・ 出前講座として、小中学校や福祉施設において、園芸教室を行っている。小学校では児童を対象にした花の植え方支援、中学校ではPTA対象の園芸講座を行っている。
- ・ 福祉施設における園芸教室の積み重ねから、現在、園芸療法の取組も行っている。

【南日本ハム株式会社：難波総務人事部長付マネージャー】

- ・ 子ども達に伝えたいことは、「食べることは生きること」である。「人間は動物や植物の様々な命をいただいて命のバトンを受け取って生かされている。だから、自分の命は大事なんだ。」ということを主旨に話をしている。
- ・ アシスト企業として、教育支援活動を行って4年目を迎えるが、子ども達から教えてもらうことが多い。
- ・ 「教える」つもりはなく、「気づき」から「学び」につながるきっかけになればと思って活動している。
- ・ 「伝えること」と「伝わること」は違うと感じている。
- ・ 弊社の教育支援活動は、単なるイベントとして終わらせないために、「体験学習」を軸に、「事前学習」と「事後学習」を行っている。「事前学習」の前には、最低2回、学校の先生と話し合い（「体験学習を通じて子ども達にどのような力を育みたいのか」等の共有や確認）を行っている。また「事前学習」の中に「よのなか先生」を位置づけている。
- ・ 経済産業省「キャリア教育ガイドブック」をもとに、「なぜ、今、キャリア教育が必要なのか。」「企業として何が重要なのか。」ということを追及したことがあった。
- ・ 「地域活性に貢献することは、社の活性につながる」ことを弊社の方針としている。
- ・ 「地域活性」とは「子どもへの支援、未来への支援」と考えている。
- ・ 食と環境は関係が深いことから、環境教育にも力を入れている。

【宮崎市立江南小学校：竹内校長】

- ・ 高千穂小学校勤務時代、教職10年経過研修における社会体験研修の場として、虎屋の上田社長に受け入れていただいたことがある。研修を受けた後、先生の意識や言動が明らかに変わった。
- ・ 先日、本校でのオープンスクールの中で、アシスト企業の方々にお世話になった。体験学習後における児童の感想の中には、先生や保護者の言葉とともに、企業の方々からの話にも説得力があることが伺えた。枝元社長のいわれる「外部教育力」の成果であると考える。
  - 4年生…ふらわぁがーでん（フラワーアレンジメント）
  - 5年生…サラ・エンターテインメント（オフレコ・朗読体験）
  - 6年生…南日本ハム（味覚体験）、九州電力（環境エネルギー）

【西都市立三財小中学校：緒方校長】

- ・ 知識を知恵に変えるためには、体験が必要である。
- ・ 三財小中学校は、一体型の小中一貫学校で、現在、小学生145名、中学生76名、合計221名の学校である。
- ・ 小学校では、菜種から油をとる活動やそば打ち体験、大豆をきな粉にする活動など、地域の方々の協力をいただきながら、保育園生と一緒にやっている。
- ・ 中学校では地元地域の事業所の協力をいただきながら職場体験を行っている。学校目標の中に「地域に貢献する児童生徒の育成」とあるように、地域を知ることが重要視していることから、アシスト企業に登録していない地元の企業・事業所の方々との連携を進めている面もある。
  - ・ 1・3年生時に、地元三財の第一次産業の職場体験活動を行っている。
  - ・ 2年生は、修学旅行時に県外（京都）においてPR活動を行っている。
  - ・ PR活動では、「西都・三財のPR」「口蹄疫復興キャンペーン」「表現力、コミュニケーション能力の育成」「西都市『食の創生都市』づくりの『発信』の手伝い」を柱に実施しているが、その際は、関係団体への協力や連絡・調整が欠かせない。
  - ・ 今後、アシスト企業がどのような形で学校経営に協力・参画していただけるのか大いに期待しているところである。

【日向市教育委員会文化生涯学習課：三浦課長】

- ・ 日向市キャリア教育支援センターを設立して3年が経過したところで大きな実績をあげている。市教委としてPRに努めている。
- ・ 子どもは、職業に関する話を親や教師から聞くよりも、実際に働いている人から直接話を聞く方が、その重要性（例：挨拶、礼儀等）に気づくことが多いと感じる。
- ・ 保護者世代においても、自分や家族以外の職種について理解する機会となっており、間接的に子どもへのキャリア教育の充実（職業の選択肢の広がりや地元に残る意識の醸成）につながっているものと感じている。
- ・ 今後も、子育て世代の家庭教育支援に力を入れていきたい。
- ・ 市内で開催される意見発表会などでの児童生徒の反応から、市の「よのなか先生」の取組も大きな成果をあげてきていると感じている。このアシスト事業のPRもしていきたい。

【宮崎県PTA連合会：井崎事務局長】

- ・ 以前、県PTA連合会主催の会合の講師を、県生涯学習課の助力を得て、アシスト企業の方に依頼したことがあった。（上田社長や難波さん）
- ・ 以前行っていた事業（5泊6日の無人島体験）において、飼っていた鶏をつぶして食べたことを思い出した。まさに食育であった。
- ・ インターネットやスマホに絡むトラブルは親の責任であると捉えている。県青少年育成県民会議や県高等学校PTA連合会、私立学校PTAと連携して、DeNAの力を借りて研修会を開催した。
- ・ 県PTA連合会の役割は、各地区PTAや各学校PTA活動の「呼び水」となるような活動を行っていくことではないかと考えている。

(3) 協議の柱②：アシスト事業における課題とその解決のための手立てについて

【(株) 虎屋：上田社長】

- ・ 「『伝えること』と『伝わること』は違う」私も常々思っている。
- ・ 発信された情報に価値があるのではなく、受信された情報に価値がある。人は受信した情報によって動く。
- ・ 発信する側は、言ったことが相手に伝わっているものとして際限なくいろいろと話をしてしまうが、相手がどのように伝わったのか、次なるアクションにどのように関わっていくのかは分からない。
- ・ 職場体験学習の後、学校からアンケートや感想をいただくが、先生方には「ここからが大事なんですよ。」と言っている。
- ・ 「現象から本質を」は学びの基本である。体験は現象である。現象（体験）は時間が経てば必ず風化してなくなってしまう。体験を自分の言葉で捉えられるかが大事である。自分たちの言葉で話をさせ、自分たちでつかんで人前で発表することが大事である。言葉の裏に体験がしっかり備わり残っていくのではないかと思う。
- ・ 「体験を言葉化していく場」をどのようにして作っていくか、どのように指導していくかが大事である。

【(有) 京屋酒造：川嶋課長】

- ・ 研修担当として、当初は「カリキュラムを組み、受け入れて、お礼の手紙をいただいて…」のサイクルに満足していた。企業側は、100パーセント伝えることは無理かもしれないが、体験した側に対して、企業側が気づいて欲しかったこと、感じて欲しかったことを確認していくことが大事である。

【(株) 馬原造園：黒木様】

- ・ 感謝の手紙をいただくことはうれしかったが、どれも似ていて「学校から書かされているのかな」と疑問を感じることもある。企業側として知りたいことは、お礼の手紙ではなく、体験した者がどのように感じたのかということであるが、なかなか伝わってこない。
- ・ 7月のオーダーが多いが、梅雨時期と重なり、受け入れた期間全て雨にたたられて苦労することが多い。時期の変更などを考慮してもらえると対応しやすくなる。

【西都市立三財小中学校：緒方校長】

- ・ 職場体験学習は年間計画で決めている事情もあり、また職場体験学習は1社だけでなく複数の企業の日程に関わることであるので、なかなか難しい現状がある。

【(株) 南日本ハム：難波マネージャー】

- ・ 形式ばった感想やお礼文ではなく、体験を通して「生徒が何を感じたのか」「生徒に何が伝わったのか」を知りたい。
- ・ 企業は「受け入れること」が目的ではなく「生徒がどう感じたのか」をつかむことが大切である。
- ・ アシスト企業は学校を支援したいから登録している。企業側にも繁忙期があったり、学校側にも年間計画があったりするが、是非柔軟に対応いただけるとありがたい。
- ・ アシスト企業と学校は、「支援する側・支援される側」ではなく、上下関係でもなく、パートナーの関係である。お互いが言うべきことを言って尊重しあいながら良い方へ改善していければ良い。

【(株) 住友ゴム工業：日高課長代理】

- ・ 体験者が短期間の職場体験学習等でどのように変容したのかを測るのは難しいし、短期間で判断できるものではない。
- ・ 6月から毎週土曜日に学習支援ボランティアを行っている。毎週末同じ児童生徒と関わっているが、教えている学習内容や理解度を通して、関わっている児童生徒の成長を感じる。短期間で成長をみる難しさを感じるとともに、継続的な別の見方ができないものか考えているところである。

【宮崎ダイシンキヤノン（株）：松尾人事部長】

- ・ 校長先生から「学校の方に飛び込んで来て」という話があったが、ある学校にアシスト企業として学校の教育支援活動について話をしに行った際、「そういう話は教育委員会を通してください。（直接学校に来られても困る）」という反応があった。それ以来、全て教育委員会を通すようになったが、組織の壁というか、フェイス to フェイスで学校と直接やることは叶わないのかという思いがある。
- ・ 教育支援活動の時期については、教育委員会や学校側に「いつぐらいが良いですか」と聞くと、同じ時期を希望されることが多く、全ての希望に添えない実態がある。
- ・ インターンシップを受け入れているが、高校生から「授業で学んでいることが、企業の生産の現場で生かされていることを実感し、授業が無駄ではないと感じた。」という話を聞いて嬉しかった。

【(株) 南日本ハム：難波マネージャー】

- ・ 学校への支援活動をはじめた頃、教育委員会を通じてある学校に行った時に、校長から「おたくも大変ですね。そこまですないとハムは売れないんですか？」と言われ悲しかった。しかし、教育支援活動後には校長先生が「これがキャリア教育なんですね。」と言われた。
- ・ 同じ系列の会社が、教育支援活動をしようとして、ある他県の市の教育委員会を尋ねたが、「私企業が学校に入ると困る。日本ハムさんが入ると他の企業も入りたがるので困る。」と言われたらしい。その市の対応と比べると、宮崎県は素晴らしい。教育委員会や学校には、教育支援活動を「企業の商品PR」と誤解するなどの固定観念があるのではないかと思う。企業の教育支援活動について、理解不足があり、それが本事業の広がりを妨げているのではと思う。

【宮崎市立江南小学校：竹内校長】

- ・ 先日、アシスト企業に来校してもらい教育支援活動を行っていただいたが、学年主任の先生が「初めて本事業の存在を知った。」と言った。生涯学習課に勤務していた時は、本事業を一生懸命にPRしたが、PR不足を痛感している。
- ・ 学校等はよくアシスト企業を「活用する」という言葉を使うが、そうではなく、「教育支援をしていただく」だと思ふ。学校とアシスト企業はパートナーシップの関係である。学校側の意識を変えなければならない。校長の認識が鍵である。
- ・ 学校がアシスト事業を知らないのはもったいない。
- ・ アシスト企業の方が、活動後に「子ども達にどのようにしたら伝わるのかということ」を勉強させてもらった。」という言葉いただき、WINWINの関係につながると感じた。
- ・ 修学旅行前に、6年生に対して、「旅行前の準備がどれほど労力を要するか」ということを、アシスト企業である旅行業者の方から話をしてもらった。児童は感謝の気持ちをもって旅行に臨んでいた。
- ・ 例年、修学旅行で知覧の特攻記念館に行く。今年は実現できなかったが、来年度は旅行前にアシスト企業であるサラ・エンターテインメントの朗読劇(実在の特攻隊員の話)を聞かせたい。
- ・ 「学校は敷居が高い。」と言われるが、敷居を高くしているのは、学校側だと思う。学校はアシスト企業の「子ども達や学校のために」という熱い思いをぜひ知るべきである。
- ・ 現在、企業と学校をつなぐコーディネーター役を県生涯学習課が行っているが、各教育事務所もコーディネーター役として担ってほしい。また、各教育事務所の社会教育主事が、アシスト企業のPR大使として、学校に対してアシスト企業のことを伝えてほしい。
- ・ 校長や教頭は長くても3年、教諭も5年ほどで異動するので引き継ぎが大変重要になる。現在、どの教科のどの単元で、どのような方に教育支援活動を行ってもらったのかを一覧表にまとめており、引き継いでいこうと思っている。「流れを止めない」ことも学校側の役目ではないかと思う。

【県教育庁生涯学習課：草薙課長補佐】

- ・ アシスト企業の教育支援活動を「イベント」で終わらせてはいけない。教育支援活動で学んだことをその後、どう生かすかが重要である。学校は、「何のためにアシスト企業に教育支援活動を行っていただくのか」、その目的をしっかりとっておかなければならない。
- ・ 「企業や地域が学校を支援するという学校中心主義ではなく、学校と地域はパートナーであって、共に目標を共有してやっていかねければならない」と文科省も言っている。そのような関係をつくっていくためにはどうすればいいのか…そのような課題についても本会でご指摘いただいた。
- ・ 県教育委員会も数々の課題があるが、その中に、「高校生の県内就職率が53パーセントで2年連続で全国最下位」がある。このままでは宮崎の将来はどのようなのだろうということが最大の教育的課題のひとつである。その課題を解決する方策として、今、キャリア教育に力を入れている。日向市の「よのなか先生」を県内に広めていくために、県教育研修センター内に「県キャリア教育支援センター」を開設しており、本日その担当リーダーや県教委のキャリア教育担当の指導主事も本会議に参加させていただいた。
- ・ このアシスト事業を、生涯学習課だけでなく、学校教育の立場や教育研修センターの立場、教育事務所の立場等、総合的な視点から皆様からのお知恵をいただきながら本事業を発展させていきたい。
- ・ 将来的には、「ふるさとが好きだ、地域が好きだ」「地域にはすごいおじちゃん、おばちゃんがいる、大変だけどすごく価値ある仕事をしている。」「将来的には、自分もその担い手の一人として頑張りたい。」と思うような、ふるさとを愛し、実際に地元に残って頑張る子供達を育てていくことが、宮崎県のキャリア教育の一番の狙いではないかと考える。アシスト企業の皆様もパートナーなので、一緒に頑張っていただけならと思う。

【県教育庁生涯学習課：恵利課長】

- ・ 本会議は今回初めて開催した。今までであれば、県民総ぐるみ事業の広いフロアの会場でアシスト企業の方々にお力をいただいていた。
- ・ 改めて今回このような会議を行ったのは、このアシスト事業に「改めて魂を吹き込もう、生まれ変わらせよう」という狙いからである。本事業の新たなスタートであると考えている。
- ・ 「県民総ぐるみの教育の推進」は、県教育委員会の第一の柱であり、アシスト事業はその屋台骨である。
- ・ 「キャリア教育イコールアシスト事業」ではない。アシスト事業の中に、キャリア教育があり、社会教育があり、家庭教育支援等がある。アシスト企業の皆様は、それらの様々な教育を支えていただくパートナーであると考えている。これからも仲間として皆様方の力をお借りしていきたい。今後、意義を理解していない保守的な学校現場もあるので、啓発していきたい。
- ・ アシスト企業として登録いただいていない企業がたくさんある。担当課としてアシスト企業の良さを全て知っておかなければならないと思うが不十分な現状がある。アシスト企業の良さや売りを把握するために努力していきたい。
- ・ 次回は違う形でこのような会を開催したい。